

交響する精神

三原正資

「一つだけ願いを叶えてあげようと神さまに言われたら」、とある音楽評論家が前置きをして、「チェリビダツケの指揮したブルックナーの交響曲第八番の演奏会へもう一度いきたい」と述べていたのを読んだことがある。「壮大に積みあげられたあの夜の音の世界をもう一度目の前にしたい……」という。

このたび、現代宗教研究所創立五〇周年の悼尾を飾る行事として、〈特別シンポジウム「現代と宗教」を考える〉を企画したのは、現宗研五〇年の歩みと合わせるように人生の日々を積み上げてきた五人の方々の宗教的人生の発する響きを聴いてみたかったからである。

幸いなことに、五人のシンポジストの精神の交響は

法華経を信じるというのも、自分が個人的体験としてそれを受け入れることに他なりません。(略) 教義と切り結ぶ個人の信ずる心に宗学が存在すると考えるからであります。

とシンポジストの一人、赤堀正明師によって述べられたように、チェリビダツケがつむぎ出したブルックナーの音楽のごとく、そのとき、そこに現前したのであった。

この意味では、野坂法行師が

日蓮聖人が（略）本当にリアリティのあるものとして法華經の教えを敷衍をしていこうとされた。それが立正安国論であり、その理想形が大曼荼羅御本尊だということを、やっぱり私達はきっちりと真正面から受け止めて、そこに参入すれば、大概の問題を解決していくいろいろな糸口がすべて出てくるというふうに、私は認識をしています。

と述べて、ご本尊とは、現在もなお宗祖がご自身の宗教的世界を語られているものであるから、私たちはその声に耳を澄まさなければならぬと指摘されたことは、心に沁みいることばだった。

シンポジウムの流れの底には、当然のこととはいえ、現状に対する各師の危機意識が見られた。

本来、宗教ってのはありがたいはずのものが、なんかちょっと異質に見られている状況です。普通の社会の中で、「日蓮聖人が」という言葉を使った瞬間に、人間関係、崩れるんです。そのためにはもっと一般的に、社会にどういうリアリティのあるボールを投げられるかというところで、その自分の価値観といますか、感じ方といますか、表に対応しているかどうか、非常に問題なんです。

この影山教俊師のことばは、戦後のこの五〇年間、法華系新宗教のめざましい伸長の中で、自己の宗教的世界をいかに表現していくべきなのかという各師の苦渋にみちた悩みを言いあらわしている。

この点で、ドイツに大聖恩寺を建立し、宗教対話を志した竹内祥起師の試みは特筆すべきものである。

自分が尊敬できる人との出会いを大切に、そして徹底的に教えの、お互いの教えを研鑽して、相手と自分と

で、私は日蓮宗ですから、日蓮聖人の教えを学ぶのに、他宗の教えが役に立つということなんです。そして、他の宗教を信奉する人と、私が日蓮聖人から、「これが日蓮聖人の教えであろう」と思うこととの間にですね、一体何が生まれてくるのか。異なるものの中から何が生まれてくるか。(略) 尊敬できる人との対話が、私は人生で、生涯でとても大事だろうと思います。

これまでの日蓮宗の中には見当たらなかった試み、ある意味教団の歴史への反省の中から今後「何が生まれてくるか」、私は期待している。

大西秀樹師は、次のように指摘された。

この十何年間にわたる立正安国・お題目結縁運動というものが、もし、このまま何もせずに(略)運動の失敗というものを迎えたら(略)、日蓮宗がついてしまう。そういう今、危機的状況を、まさに迎えてると思うんですよ。(略) この日蓮宗の運動を絶対に失敗させてはいけない。で、その本体は誰だと言えば、私はこの現宗研の皆さんだと思うんですよ。

大西師は次のようにも述べている。

ゼロは何人集まってもゼロであるという、一は百人集まれば百だけど、ゼロは何人集まってもゼロである……

これは痛烈な指摘である。宗教の実体は人間である。信仰して生活している一人ひとりである。他人まかせではな

く、他ならないあなたや私が「即是道場」の主体とならなければならないということである。

シンフォニーという言葉がありますが、これは闘争と同時に調和をもたらすという意味があるそうです。それぞれの演奏者が、それぞれの個性を活かして、それぞれの最大限の音を鳴らすところに真の調和があると言われていそうです。

ちなみに、日本人は一回めのリハーサルから音が合ってしまうというのがね、初めっから、けんかしない、仲良くやろうというところが目的のために、本来の持っている個性、持っている能力を発揮せずに終わってしまう。そこを経過して、この竹内上人のおっしゃっているところへ（註、対話）に入っていけたならば、非常に優れた宗門の未来像が描かれるのではないか……

という赤堀正明師のことばが印象的である。

短い時間の中で、シンボジスト各師の個性をひきだし、まとめた司会の高佐宣長主任に感謝したい。

このシンボジウムにふれた方々が、あらためて各々の未来像を描いて下さることを願う。

このシンボジウムで五人の方々の方々の築きあげた、個性にあふれた宗教的世界の交響が、未来への贈りものとなると思っている。